

地方大学の日本人大学院生の大学生生活における意識変容の語り

－質的調査の観点から－

Narrative of Japanese Graduate Students about their Consciousness
Transformation through University Life in a Provincial University :

From the Perspective of Qualitative Research

恒松 直美 (広島大学)

Naomi Tsunematsu (International Center, Hiroshima University)

総合学術学会誌 第14号 日本総合学術学会 2015年
Journal of Society for Interdisciplinary Science, Vol.14
Japan Society for Interdisciplinary Science, 2015

地方大学の日本人大学院生の大学生活における意識変容の語り — 質的調査の観点から —

Narrative of Japanese Graduate Students about their Consciousness Transformation through University Life in a Provincial University : From the Perspective of Qualitative Research

恒松直美 (広島大学)

Naomi Tsunematsu (International Center, Hiroshima University)

Abstract:

This article examines how consciousness of Japanese graduate students has been influenced and transformed through university education in a provincial university. University period is a transition time for students to prepare themselves to go out to the real world, by searching for their life path and finding the way to make a difference in the world. For graduate students it is the time to end their moratorium period, and their search for the way to connect what they have learned as a graduate student with their future career becomes one of the most important themes in their lives. In their search for their future career, graduate students are seriously searching for the meaning of their university education. By conducting semi-structured interview with graduate students in various fields, I shall examine the factors which have influenced and transformed consciousness of graduate students. I have attempted to reveal 'students' real voices', by using qualitative research method.

Keywords: graduate students, Japanese university, transformation, narrative, qualitative research

1. はじめに—本研究の目的

本稿では、広島大学に在籍している大学院博士課程前期（修士課程）及び大学院博士課程後期（博士課程）の日本人大学院生に焦点をあて、日本の大学教育による大学院生の意識変容について考察する。日本の地方にある大学に在籍する大学院生が、大学生活からどのように影響を受け意識を変容させているのかについて学生の視点から幅広く考察し、大学院生は日々何を考え、何に動かされているのかの実態を多角的に探り、大学における大学院生の支援の在り方を再考する糧とする。

1990年代に開始された大学院重点化政策により大学院進学者が増加した結果、学生の質の低下や修了後の就職難の問題が問われ、現在重点化政策の意義が問われている。また、2008年に公募された「専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム」(文部科学省 2009)により、大学院の果たす役割として、研究者養成と高度で専門的な職業能力

を有する人材養成が定められる中、大学院の量的拡大が進んだ。文部科学省が「大学院教育改革支援プログラム」(文部科学省 2008)等を実施する過程で、大学院の教育の質が問われるようになった。さらに、グローバル人材育成事業や海外留学の推進、留学生増加政策により、大学では社会人学生、留学生、日本人学生がともに学ぶ環境が生まれ、大学院進学のもも多様化してきた。大学は国際競争に晒され、大学教育の質保証やアカウンタビリティについて国際レベルで問われるとともに国内でも教育成果の明示が求められている。本研究では、大学院進学の意味が問われる状況下、地方にある広島大学の大学院生が、大学生活において意識を変容させる要因を学生の語りをもとに多角的に分析することにより、大学が学生に提供し得る教育と研究の機会の発展と支援体制の構築の可能性を探る。

2. 本研究の背景

本研究では、研究生活のみでなく、学内・学外にお

ける幅広い人々との関わりを含む大学生活全般に関し、大学院生の意識変容をもたらした要因について探る。現在、大学教育改革について日々議論される中、理論的見解と大学院生の意識との間の乖離が見られる。例えば、「大学の国際化拠点整備事業（グローバル30）」（前掲）などの大学におけるグローバル人材の育成事業などの政策を知らなかったと述べる学生は学部・大学院を問わず多い。日々の大学生活において大学院生は何を考え、何に影響されているのか。大学院生の大学生活全般における意識変容の問いは、教育を受ける側の日常の現実を探り出し、真の心の内面を表面化させる可能性を持つ。

これまでの大学教育と日本の大学生の意識変容についての研究では、高等教育に対する学生と教員の意識変化についての調査（瀧上, 1998）や、異文化体験による学部生と大学院生の日本人的心性の変容の研究（鶴田・小川, 1985）、異文化接触のある協同的活動がもたらす留学生と日本人学生の相互の意識変容の研究（神谷・中川, 2007）、日本語学習支援活動による学部生と大学院生の意識変容の研究（水野・ハリソン・高梨, 2012）、教育改善活動に参加する学部生と大学院生の意識変化についての調査（安田・近田, 2009）等がある。また、キャリア教育プログラム、インターンシップ、ボランティア活動などに関する先行研究のレビューに基づき、大学院生の課外活動による意識と行動の変容とその尺度の在り方について調査した研究（日潟・谷・上長・則定・石本・齊藤・城, 2008）がある。課外活動の事前と事後の自己内での位置づけが意識変容に影響を与えることが示唆されている。

しかし、大学教育による大学院生の意識の変容を総括的に把握するような意識変容についての質的調査はあまり発展していない。日本の大学に約1年間留学した交換留学生の意識変容の研究（恒松, 2012）では、交換留学が学生の人生観と世界観や将来のキャリア展望に影響を与えていることが分かっている。日本人の大学生の大学生活における意識変容の研究（恒松, 2014）では、大学教育が学生の意識や人生観に与える多面的影響が明らかとなっている。

大学院生が地域社会や企業など大学外の組織と連携した研究プロジェクトに従事し、相互作用によりプロジェクトに十全的に参加するようになるプロセスを調査した研究（岸磨・久保田・盛岡, 2010）では、

専門的で実践的な知識や技術を習得し社会に貢献できる力の習得を大学院生が求めている現実を指摘し、研究活動のみでなく、大学外の組織と連携した活動の重要性を論じている。

学力形成実感や学生生活における人格形成と充実実感などの大学院進学者の実態の分析と修了後の就業実態の調査、採用側の実態調査、現行のキャリアデザインプログラム（CDP）の効果検証を行った研究（井上・伊藤・平井・折田, 2009）がある。早期に希望する就職のイメージを描き、社会通用性を身に着け、研究活動で得た論理的思考力により抽象度の高いものを具現化する能力などの汎用的能力を自覚する重要性が指摘されている。専門性を活かす場が稀有であると感じる状況下、他者との関わりで進路を再考し、新しい業種や職種に進路変更した大学院生が多くいたことが明らかとなっている。

これらの先行研究が提示するのは、留学生との協同作業や課外活動、社会との連携や貢献により大学院生が変容した実態と、大学院生自身がその重要性を認識している現実である。大学院進学的主要目的は研究に集約されがちであるが、進路を考える状況下、研究との関わり方を広範囲から思索できる活動の中で大学院生の意識が変容していることが分かる。

Dalton (2001) は、大学時代は、多様な事象に対し疑問を持ち、人生の目的を見つけ、自分自身のアイデンティティを確立する時期であると論じる。自身の精神性（spirituality）を探求し、社会に出る準備をする過程で敏感に反応する時期が大学時代である。Mezirow (1994) は、意識変容の研究で、生き方やアイデンティティについて根本的な問い直しをせまるジレンマとの遭遇、異文化との接触による新しい価値観や思想との出会い、啓発的な議論や作品との接触による価値観の揺さぶりにより、人はそれまでの自明性や安定性を疑問視するようになると論じる。大学時代は、成人へと変容しつつ、将来のキャリア選択に影響する経験の意味づけを行い、多様な体験を通じて価値観を形成する時期であるが、大学院では、学部と比較し、研究の重要性と研究室との関わりが増す傾向にあることに鑑み、大学院生が研究に取り組む過程で何を求め影響されているかにも着目する。

3. 調査概要

3.1 調査対象者とその背景

本調査における分析の対象を広島大学に在籍する大学院生とし、多様な専攻分野を背景に持つ大学院生を調査するため、様々な機会に接した幅広い範囲の学生に依頼しインタビューを行った。授業の受講生、アルバイトで雇用した学生やその学生のサークル仲間や学内のつながり、筆者担当の交換留学生向け授業の全学公開セミナーに参加した学生など、様々な学生にインタビューできるよう配慮した。インタビューは、2009年4月から2014年8月までの間、大学院博士課程前期（修士課程）及び博士課程後期（博士課程）に在籍する、女子大学院生12名、男子大学院生19名の合計31名に対し行った。女子大学院生の所属は、教育学研究科、総合科学研究科、工学研究科、生物圏科学研究科、先端物質科学研究科で、男子大学院生の所属は、教育学研究科、大学院国際協力研究科、工学研究科、生物圏科学研究科、先端物質科学研究科である。学年ごとの人数は、大学院博士課程前期1年生（男女合計）13人、2年生（男女合計）12人、大学院博士課程後期（男女合計）6人である。その概要を表1に示した。

表1. インタビュー回答者の性別・所属別人数

大学院		修士1年	修士2年	博士1年	博士2年	博士3年	博士5年	女性合計	男性合計
総合科学研究科	女性	1	1	0	0	0	0	2	
	男性	0	0	0	0	0	0		0
教育学研究科	女性	3	2	1	0	1	0	7	
	男性	7	2	2	0	1	1		13
国際協力研究科	女性	0	0	0	0	0	0	0	
	男性	0	1	0	0	0	0		1
工学研究科	女性	0	1	0	0	0	0	1	
	男性	1	1	0	0	0	0		2
生物圏科学研究科	女性	0	1	0	0	0	0	1	
	男性	0	1	0	0	0	0		1
先端科学研究科	女性	1	0	0	0	0	0	1	
	男性	0	2	0	0	0	0		2
合計		13	12	3	0	2	1	12	19

3.2 調査方法

1～4時間に渡る1対1形式の半構造化インタビューを教員の研究室で行った。インタビューの開始前に、話したくないことは一切話す必要がないこと、秘密を厳守し、本人であることが特定可能な形で論文等に記載することはないことなど、プライバシーには十分配慮することを明確に説明した。大学院生の場合、周りとの人間関係や自身の立場を考慮しての発言となりがちなため、秘密厳守について明言することにより、可能な限り自由に本心が語れるよう配慮した。インタビューの内容はその場で記録した。

インタビューの解釈と分析は、研究者の価値観や人生観が影響し、研究対象者との相互作用によりナラティブが引き出される。相互の価値観の交錯により体験が意味づけられた結果、調査結果が得られたと認識している。

本研究は、学生が教員に深い内面を語るインタビューであり、面識のあまりない大学院生が、即深い内面を語ることは少ない。教員との信頼関係に基づき学生は安心して内に秘めた気持ちを語る傾向にあり、教員との距離感や関係性が話す内容と内面を開示するレベルを左右する。個人の開示レベルの差や研究科による人数の偏りも認識したうえでインタビューした大学院生全員を分析対象とした。本調査は、専攻分野による意識変容の要因の違いや特殊性を分析することを目的とせず、幅広く大学院生が意識を変容させた要因を探るものである。同じ研究科に所属する大学院生から種々の要因が抽出された現実、異なる研究科に所属する大学院生から類似した要因が抽出された現実、大学院生全般における意識変容の要因として抽出された要因が多岐に渡る現実を踏まえ、学生が所属する研究科により回答者数が異なることについては、本稿では特に問題ではないと判断した。

3.3 調査内容

授業、研究室での関わり、教職員との関わり、研究活動、課外活動や国際交流、社会体験、個人的生活など、学問的・社会的・文化的・個人的側面を含む大学生活全般の大学院生への影響を総括的に分析した。まず質問項目を設定し、パイロット・スタディとして教育学研究科の大学院生5名にインタビューを行い、多面的に意識変容の体験を語るインタビューとなり得ていることを確認した後、多様な研究科の大学院生のインタビューを行った。インタビューでは、以下に挙げる項目に関し、影響を受けたり自身が変容したと感じたことについて自由に話してもらおうようお願いした。項目は、**1. 勉学と関連した大学生活**（授業と研究、大学教員との接触、研究室との関わり、留学経験、大学に望むこと）、**2. 学内における交流**（クラブ活動、国際交流等）、**3. 社会体験**（ボランティア活動、社会人との接触、アルバイト等）、**4. 将来**（将来のキャリア、希望する職業、研究と就職との関係性）、**5. 自分の人生**（生きる意味、自分の深い部分に触れた人、直観の声など）である。

4. 分析と結果

4.1 分析方法

インタビューで学生が述べた言葉を Max QDA ソフトを使用して全て記録した。その記録を、女子大学院生と男子大学院生について、別々にインタビュー・データとコーディングを提示し、さらにカテゴリー化した。インタビューの記述内容で意識変容に関する部分を「インタビュー・データ」として提示し、その「要約」と抽出した「意識変容に関するコード」を、表2（男子大学院生）と表3（女子大学院生）に提示した。さらに、類似したコードをカテゴリーに分類し、表4（男子大学院生）と表5（女子大学院生）に示し、最終的に男子大学院生と女子大学院生のカテゴリーを統合したカテゴリー・グループを生成し表6に提示した。

分析では学生自身が語った言葉を重要視した。大学院生になるまでの人生における出来事は多くの要素が多角的に関連性を持ち複雑に絡み合い、大学教育からの影響もそれ以前の人生の体験と連動していることも多々ある。客観的現実の存在を批判し、各自が外界との相互作用により自分の現実を構築しているとの構築主義の考えに依拠すれば、人の記憶の曖昧さとその変容性が指摘でき、学生自身の解釈と記憶も絶えず変容していると言える。本稿の考察においても、学生の経験には複雑な要因が絡み合い、その解釈は変化することに鑑み、客観的事実の提示には限界があることを認識した上で分析した。

4.2 分析結果

男子大学院生から表2（一部表示）と表4に提示した72の意識変容のコードが抽出され、それを42のカテゴリーに分類した（表4）。女子大学院生からは、表3（一部表示）と表5に示す52のコードが抽出され、25のカテゴリーに分類した（表5）。抽出されたカテゴリーのうち、「授業方法への要望」・「高い英語能力の必要性」・「研究室との関わり」・「大学院進学に対する考え」・「幅広い大学院生とのつながり」・「キャリアについて知る場の要望」・「就職活動による進路の広がり」の7つのカテゴリーは男子学生・女子学生の両方から抽出された。男子学生と女子学生とで総合して類似したカテゴリーをまとめた結果、合計で55のカテゴリーが抽出された。さらに、カテゴリー間の関連性の高いものを集約し、最終的に15のカテゴリー・グループを生成した（表6）。類似した

カテゴリー・グループの概念をさらに1)~8)の各項目に集約し、考察結果を提示した。博士課程前期と博士課程後期の学生から抽出された意識変容のコーディングは同様にカテゴリー化できた。質的な違いとして、後期の学生に留学や実習により世界レベルの研究や理論の重要性をより強調する変容があった。

1) 大学での勉学・研究（大学の授業に対する考え・研究の意義と研究意欲）

理論的知識と現場との乖離を疑問視し、実践の場での体験に価値を見出し、現場と結びつく授業を要望するようになった学生、逆に学問の価値付けをするようになるケースがあった。研究で技術が重要視され、感動や人への貢献を感じられないことから研究意欲を喪失し、就職活動への意欲も喪失した学生がいた。同様の問題に直面し、指導教員や先輩からの精神的支援を望むようになった学生がいた。

2) 研究室との関わり（大学教員との関わりと研究・進路/研究室との関わりと居場所）

学部時代の大学教員との接触が研究への興味を喚起し大学院進学を決定したり、専門外の先生との接触により新しい視点から自分を見つめ直す学生がいた。教員の発言により希望の就職先を断念するケースからは教員が学生の就職意識に与える影響が分かる。大学院の夢と現実のギャップを見て、入学前に大学院の現状を知るべきだとの考えに至った学生がいた。

3) 留学・国際教育（英語能力と国際性/留学・海外実習がもたらす影響/留学生の学びと交流）

国際学会で議論するなど世界レベルの研究では英語力が必要であるとの認識を持つようになっている。学内の国際セミナーで英語が通じた体験が自信になった学生、海外実習により社会問題への関心が高まり研究への興味が喚起された学生、海外ホームステイで異文化への抵抗が少なくなった学生、海外生活の影響により外国人と関わる仕事を希望する学生など異文化との接触の影響は大きい。留学後、新しい人の輪の中に勇気を出し入れるようになった学生や行動的になるケースなど態度を変容している。留学生と共に学び交流する機会の拡大を望む学生もいる。留学生の留学や研究の目標を聞いて刺激を受けた学生は、留学生が持つ影響力を指摘している。

4) 社会体験・実習（教育実習による現場体験の価値/社会活動・アルバイトによる社会人との出会いと実体験）

表2. インタビューのデータとコード名 (G1: 男子大学院生) 一部のみ掲載

- 注: 1. 「**」は途中で他のナラティブがあったことを意味する。
 2. 匿名性を守るため、大学名・企業名・個人名等はイニシャルとした。
 3. インタビューの一部のみの抜粋のため文脈が理解しにくい箇所については()に追加説明を加えた。
 4. 匿名性を保ち個人を特定できないよう言い換えた言葉は[]で示し、匿名性を保つため省略した部分は[**]と示した。
 * 「M1」は大学院博士課程前期1年を意味する。
 * 「工学」=大学院工学研究科, 「生物圏」=大学院生物圏科学研究科, 「先端物質」=大学院先端物質科学研究科,
 「教育」=大学院教育学研究科, 「総合科学」=大学院総合科学研究科

学生 No.	ID.	学年	インタビュー・データ	項目 No.	要約	意識変容に関するコード
1	001 教育	M1	広島にきてよかった。バイトで、昔の武勇伝。そういう生活をした人達が、どういった人生かを今、広島でわかる。	1	アルバイトによる多様な社会人との出会いにより、人の過去と現在を連携させて理解した。	アルバイト体験による幅広い人々の人生の認識
5	005 工学	M2	うつな気持ち。一つは、研究が思うようにいっていない。ロボット関係。問題は、研究をやっている中で、勉強できていない。やっつけ行かなくちゃ。 **行動ができていないな、というのが。研究の方向性。わからない。視覚障害者の歩行支援の先。盲導犬ロボット開発。そのレベル。方向性がそうになっているが、ニーズ、視覚障害者のことがわかっていないので初めにイメージしていた方向とずれている。納得できるコンセプトを目指せばやる気が出る。**ロボットの制御とかの、もっと前でつまづいている。それで先生にまだ(具体的な研究の次の段階について)相談していない。	12	研究をする過程でその背景となる知識がなく、研究のニーズや、その研究による人への支援について(自分は)理解していない。納得していないため、実験の次のステップにいけなっている。	研究の意義と人への貢献を理解する意義
			就職(試験)、受けていない。4、5月がメイン。みんな受ける。友人内定もらっている。何がしたいのかが分からなくなった。調べてはみた。説明会行った。流れに乗れなかった。**説明会以上にしなかった理由。志望理由書いてみたりしても、本当か分からなくなった。ロボットかと思わない。アルバイト。していない。なにがしたいかわからない。	13	研究の意義が分からなくなり、本当は何がしたいのかわからなくなり、就職活動も休止している。	研究意欲の喪失による混沌
			留学生と一緒に授業を受けたい。企業セミナー(T先生の)講義、英語力ない。聞きたい。分からなくても聞いてみたい。	14	(研究意欲を喪失し)英語が理解できなくても留学生と一緒に授業を受けたい。	留学生と新しく共に学ぶ要望
6	006 生物圏	M2	広大な学部生と、高専と違う。量も質も違う。ぼくが理系ばかりを勉強したいと思っていないので、他のものを学びたいから思うのかもしれない。専門科目ばかり、高専は。高校、英語はコマ、2コマばかり。弱い。学ぶ意志があれば、どの学部でも。大学生に対して、専門しか学んでいないので、専門ばかり学んでいたの、他のこと学びたい。本で学べない。人と会いたい。異なる人と会いたい。多くの高専の人は思っていない。	20	高専から編入。大学では専門科目のみでなく、広く学びたい。多くの人と会い、本で学べないことを学びたい。	総合大学を生かした幅広い学びと人との出会いの要望

表3. インタビューのデータとコード名 (G2: 女子大学院生) 一部のみ掲載

学生 No.	ID.	学年	インタビュー・データ	項目 No.	要約	意識変容に関するコード
1	001 総合科学	M1	将来、考えている。就職活動した。大学入って、就職しようと思った。うまくいかなかった。**やりたいことがはっきりしていない。手当たり次第受けている。まあ、社会人になる切符もらえなかった。その後どうしようかと思ってた。8月。**すごい悩んだ。実際に一般就職を前提に考えていた。大学院、文系。進むと幅が狭くなる、と先輩からも言われていて。どうしようかと思った。狭くなる。というものなかった。考えてなかった。大学院に進学した時に何を勉強するのか、考えていなかった。	1	就職活動が期待どおりいかず、あまり考えず大学院進学を決めた。	就職活動の失敗による大学院進学への転向

教育実習の現場で理論の軽視を感じ、理論の勉強への要望を持った学生がいた。ボランティア活動やアルバイトを通じ学問と実践の場のつながりや現場体

験を持つ意義を感じている。学外の人との接触が社会支援活動に携わる契機となったり、厳しい価値観を持つ社会人のロールモデルの存在が影響している。

表4. カテゴリーの生成 (G1: 男子大学院生)

意識内容に関するコード	No.	カテゴリー
学生のことを考えた授業をする要望	37	授業方法への要望
指導教員の厳しい指導で身に付けた能力の自信	26	教員の指導による自信
大学で何ができるかの示唆の要求	62	大学でできることの示唆
勉学より自由な時間を持つ価値の認識	51	大学での自由な時間の価値
人としての幅を広げる場としての大学の認識	55	
自由な生き方についての見解	60	
社会で学ぶ実務能力の習得以外の大学での学びの意味	65	
自分で自由にしたいことをする意義	66	
自分で勉強して知識をつける重要性の認識	53	自分で勉強する重要性
入学した場所で見出す価値	68	入学した場所の価値
研究室での実際の研究の現実を早く知る要望	3	研究室との関わり
自分の興味のあることを研究し将来に生かす要望	6	研究を仕事で人に貢献する要望
誇りを持って研究と仕事の重要性	7	
研究成果による人への貢献の重要性	9	
研究の意義と人への貢献を理解する意義	13	
研究意欲の喪失による混沌	14	研究意欲の喪失
自分の研究の有益性と意義に対する疑義	38	
大学院で勉強する意味の喪失	69	
大学院の厳しい環境におかれる意味	52	大学院の厳しい環境の意義
大学院授業における理論に基づいた発表の意義	59	
英語で議論できるロールモデルの重要性	11	高い英語能力の必要性
英語力を世界レベルで研究する要望	34	
専攻外の教員との出会いによる新しい視点	27	専攻外の教員との出会い
研究生活での精神的支援の要望	8	研究での精神的支援の要望
教育実習による大学院進学への意欲の強まり	35	教育実習による大学院での研究の興味
教育実習による理論的研究への意欲の高まり	36	
教育現場での実践を持つ要望	58	教育の現場体験の要望
社会経験を経た後に体験する大学院の意味	2	大学院進学に対する考え
留学によるコミュニケーション能力への自信	30	留学・海外体験による行動への影響
留学中の出会いによるアクティブな人間への寛容	31	
留学により得た新しい世界に入る勇氣	32	
異文化で生活する意義と自信の習得	50	
留学による日本国内での移動に対する意識変化	49	留学によるキャリアの意識変化
何がしたいかわからないことによる留学への要望	18	混沌の中からの留学の要望
留学生と新しく共に学ぶ要望	15	留学生との交流と学びの要望
留学生と交流する要望	23	
留学生もいる環境で本で学べないことを広く学びたい	22	
留学生の目的意識が日本人学生に与える影響	44	留学生の留学の目的意識による刺激
留学生の知見による影響	47	
国際セミナーへの参加による自信と転部への決心	10	学内の国際セミナーによる影響
部活動での人間関係の問題による人への意識変化	56	クラブ活動での人間関係からの学び
部活動の監督の行動力による影響	71	クラブ活動の監督からの影響
先輩と社会人と仕事をして多様な価値観を知る良さ	43	社会人と活動して知った価値観
社会人から学ぶ国際交流の異なる視点	45	
総合大学を学んだ幅広い学びと人との出会いの要望	21	幅広い大学院生とのつながり
将来の相談など人とのつながりを要望	46	
研究室以外の人と知り合う要望	57	
同級生による異なる考え方についての認識	70	
大学院生活での居場所	54	自分の居場所の要望
所属意識を感じる場所の重要性	72	
先輩と後輩のネットワークによる国際的体験への影響	12	先輩と後輩のネットワークと国際体験
行動力を持つ要望	16	自分で行動する意義
自分でやりたいことを見つめる人間になりたい	39	
大学教員の発言による進路選択への影響	19	大学教員による進路への影響
将来を考えるセミナーの要望	20	キャリアについて知る場の要望
就職を意識し、仕事や自分を知る教育環境の要望	28	
進路を変更した先輩が与える影響	17	先輩の進路の影響
就職活動による専門分野と関わる仕事の多様性の認識	5	就職活動による進路の広がり
就職活動による希望職種以外の道の探求	64	
研究分野より活気と夢のある企業への就職選択	24	専門分野に限定しない就職
専門分野以外の道の存在の認識	63	
起業によるビジネスの現実の学び	29	起業体験によるビジネスの認識
アルバイトでの仕事による仕事選択への影響	67	アルバイトによる仕事の実体験による影響
アルバイト経験による自分の特性の発見	73	
アルバイト体験による幅広い人々の人生の認識	1	アルバイトによる幅広い人々の人生の学び
実務を学生が体験する場の提供の要望	42	大学での実務経験の場の要望
自分と違う世界の社会人の話を聞く重要性	25	多様な経験豊富な人々と仕事について学ぶ要望
社会人との出会いによる世界観の広がり	33	社会人との出会いによる影響
先輩や社会人とのつながりによるロールモデルとの出会いの要望	40	
社会人からの学びによる社会人との出会いの意味の発見	41	
広く人と接し人間味のある人になる要望	48	人間味のある人になる要望
成長している実感の探求	61	成長している実感の要望

表5. カテゴリーの生成 (G2: 女子大学院生)

意識内容に関するコード	No.	カテゴリー
学部の授業を少人数制にすることを要望	8	授業方法への要望
実践的な授業の要望	18	実践的な授業の要望
入学後、専攻を選択できる価値	46	大学での自身の選択と興味
学部時代に希望を持ち学ぶ重要性	32	
卒業論文の取り組みによる研究の興味への影響	35	
研究における英語の重要性の認識	47	高い英語能力の必要性
指導教員の厳しさが研究者希望の大学院生に与える影響	12	教員による研究の興味への影響
学部時代の教員による研究への興味の影響	29	
学部時代の先生との出会いによる研究への動機づけ	41	
自分から教員に話しかける必要性	25	教員への働きかけ
研究室に縛られない大学院生活の要望	36	研究室との関わり
教育実習による学生を意欲する重要性の認識	37	教育実習による学生の見解の認識
就職活動の失敗による大学院進学への転向	1	大学院進学に対する考え
教育実習のメンター教員が与える大学院進学への影響	24	
受講した授業の教員による大学院進学への影響	33	
外国生活をキャリアに生かす要望	4	海外生活によるキャリアの意識変化
日本と違う環境に住む要望	16	
学部時代の留学による研究への興味喚起	13	留学・海外実習による研究の興味
海外実習による社会問題への興味喚起	39	
海外ホームステイ体験による外国人との関わり方への影響	9	留学・海外実習による人との関わりへの影響
海外実習による他学部の友人関係の広がり	40	
留学生との交流の機会の拡大の要望	19	留学生との交流の要望
ボランティア活動の有用性	20	ボランティア活動と地域での現場体験による影響
ボランティア活動による理論の有益性への価値づけ	34	
ボランティア活動による新しい出会いと知識の吸収	42	
地域研究による行政職への興味喚起	43	
ボランティア活動による現場体験の意義	51	
ボランティア活動による積極的に動く実行力の習得	52	
他学部の学生と接し異なる視点や学びの機会を要望	26	幅広い大学院生とのつながり
学問を楽しむ他の大学院生による刺激	30	
多様な大学院生とのつながりの要望	31	
異性と交際がもたらすプラスの感情	11	異性と交際が生む感情
自分で体験する重要性	21	自分で行動する意義
目的を持ち自分で行動して情報を得る必要性	22	
キャリアについて考えるきっかけ作りへの要望	2	キャリアについて知る場の要望
所属学部の先輩のキャリア選択を知る要望	3	
就職活動も大学院進学も両方体験する価値	7	就職活動による進路の広がり
就職活動がもたらした大学院以外の進路選択もある安心感	38	
就職活動による勉強の必要性の認識	48	
仕事を実際に見たことによるキャリアへの影響	15	アルバイトによる仕事の実体験による影響
アルバイト体験による人への心遣いの重要性の学び	23	
多様な世代の経験豊富な人と話す要望	5	多様な経験豊富な人々と仕事について学ぶ要望
社会にある仕事の多様性を早く知る要望	6	
人の苦労した話を聞き将来を考える機会の要望	17	
大学院進学に強い意志を持つ女性による影響	14	他の女子学生による影響
女性教員による研究者の進路選択への影響	27	女性研究者のロールモデルによる影響
女性教員のロールモデルの重要性	28	
女性研究者との出会いによる研究職のあこがれと不安	44	
女性研究者への特別視による研究者の進路選択の不安	45	
女子学生は理系は不得意であるとの認識	49	実際に勉強したことによるジェンダー観
理系女子の現実を大学が認識する必要性	50	
家族の死の痛みから学んだ感謝と人の強さ	10	家族の死による人生観の寛容

5) 大学でのネットワーク・クラブ活動 (学生間のネットワーク・つながり/クラブ活動からの学び)

大学院生活では研究室内に人間関係が絞られる傾向

表 6. G1・G2 より生成されたカテゴリー・グループ

カテゴリー	カテゴリー・グループ
授業方法への要望 実践的な授業の要望	大学の授業に対する考え
大学での自身の選択と興味 大学でできることの示唆 大学での自由な時間の価値	大学での自由さの活用
高い英語能力の必要性 学内の国際セミナーによる影響	英語能力と国際性
教員による研究の興味への影響 教員への働きかけ 教員の指導による自信 大学教員による進路への影響 専攻外の教員からの新しい視点	大学教員との関わりと研究・進路
研究室との関わり 大学院の厳しい環境の意義 自分の居場所の要望	研究室との関わりと居場所
研究を仕事で人に貢献する要望 研究意欲の喪失 研究での精神的支援の要望 自分で勉強する重要性	研究の意義と研究意欲
教育実習による学生の見解の認識 教育実習による大学院での研究の興味 教育の現場体験の要望	教育実習による現場体験の価値
海外生活によるキャリアの意識変化 留学によるキャリアの意識変化 留学・海外実習による研究の興味 留学・海外体験による行動への影響 混沌の中からの留学希望	留学・海外実習がもたらす影響
留学生との交流の要望 留学生との交流と学びの要望 留学生の留学の目的意識による刺激	留学生との学びと交流
ボランティア活動と地域での現場体験による影響 社会人と活動して知った価値観 社会人との出会いによる影響	社会活動・アルバイトによる社会人との出会いと実体験
アルバイトによる幅広い人々の人生の学び アルバイトによる仕事の実体験による影響 先輩と後輩のネットワークと国際体験 幅広い大学院生間のつながり 異性との交際が生む感情	学生間のネットワーク・つながり
クラブ活動での人間関係からの学び クラブ活動の監督からの影響 キャリアについて知る場の要望 多様な経験豊富な人々と仕事について学ぶ要望 就職活動による進路の広がり 先輩の進路の影響 専門分野に限定しない就職	クラブ活動からの学び 就職活動と大学院進学・キャリア
起業体験によるビジネスの認識 大学院進学に対する考え 人間味のある人になる要望 成長している実感の要望 家族の死による人生観の変容 自分で行動する意義 入学した場所の価値	成長・行動力・人生観
他の女子学生による影響 女性研究者のロールモデルによる影響 実際に勉強したことによるジェンダー観	ジェンダー観

にあるため専攻外の幅広い大学院生と知り合う機会を求めている。学内の国際セミナーなどで先輩と後輩が知り合う意義や、英語ができる先輩のロールモデルを持つ効果など、学生間のネットワークの意義を述べた。体育系クラブの監督が仕事とボランティア活動で幅広いネットワークを持ち活躍する姿を見て、行動力を持つ重要性を認識した学生がいた。

6) キャリア・就職活動（就職活動と大学院進学・キャリア）

就職活動も大学院進学も両方経験し、大学院以外の選択肢を実体験したことで自信をもった学生、就職活動により専門分野が仕事と直接結びつく必要はないとの見解に変容した学生、社会の多種多様な仕事を知る要望が強くなった学生など、就職活動が進路を幅広く捉える意識へと変容させている。多くの選

択肢について具体的な知識の習得を求める傾向にある。広島大学のある東広島市が、企業等が集中する広島市内から離れている地域性も幅広い社会人との交流を阻む要因となっている。実社会の仕事に関する具体的な知識や実体験への渴望があると考えられる。

7) 成長・人生観（大学での自由さの活用/成長・行動力・人生観）

就職後、企業で仕事をしている先輩の話を聞き、大学時代の自由な時間の価値を感じるようになった学生がいる。家族の突然の死により感謝して生きたいと変容した学生、日々の成長を実感したいと思うようになった学生、入れた大学で価値を見つけていく重要性を感じるようになった学生など、人生や大学生活の生かし方について変容が見られる。

8) ジェンダー観

女性研究者との出会いが研究者への道へのあこがれを強くしたり現実の不安を駆りたてたりしている。女性教員のロールモデルにより博士課程進学を決定した女子学生、確固たる信念で大学院進学を決めている女性との出会いにより自身も大学院進学を決定するなど、女性が研究者を目指す上で女性のロールモデルの存在が進路決定に強い影響を与えている。

5. 総合考察

本研究は、大学院生が平素教員や大学関係者に語ることの少ない大学生活による意識変容について質的調査を行ったものである。大学生が大学教員と一対一で向き合い、教員に内面を語る経験は稀であるとの意見が多かった。大学院での学びと将来との関連付けを求めつつ、他の大学院生・教員・大学外とのつながりを求めている姿があった。モラトリアム期間の終焉に向き合いつつ、研究の明確な意義づけや実社会と仕事の具体的な知識を求め中、学生は敏感に変容している。女子大学院生は女性研究者のロールモデルにより影響され、男子学生も、社会人や先輩のロールモデルから強い影響を受けている。

学生は、大学院入学時、大学院で何を達成し将来につなげるのかについて明確な認識を持っていない傾向にある。入学後に研究の意味や実社会との具体的

関係性を模索し、その過程での様々な体験を通じ、意識を変容させる様子が見えた。天野 (2004, 164-166 頁) は、構造化された「知」の獲得が困難となった現在において、大学を学生が達成感を味わえる知的挑戦の場及び人間形成空間として再編成する意義を説く。まさに大学院生はその点で揺れ動いている。

社会人との接触、就職活動、留学体験や実習、ボランティア、現場体験、などの体験的学習や大学内外の人々との接触により学びの実感を得て、学生は世界観を変容させ、意識を変容させている。自分の研究を社会に生かす道について実体験により手ごたえを感じた時、研究と将来への向き合い方も変容する。研究者を目指す学生を除いては、大多数が大学院教育が持つ実社会での意味とその具体的関連性を探しつつ、幅広い人とのつながりと実社会の知識を希求している。大学院での学びを現実社会でどう生かせるのかについての大学からの具体的な提示が、大学院生への大きな支援となることは間違いないであろう。

【引用文献】

- [1] 天野郁夫 (2004) 『大学改革—秩序の崩壊と再編—』東京大学出版会。
- [2] 井上拓也・伊藤昇・平井英嗣・折田章宏(2009) 「文系大学院生を対象としたキャリア形成支援プログラムの開発」『大学行政研究』第4巻, 111-124頁。
- [3] 神谷純子・中川かずこ (2007) 「異文化接触による相互の意識変容に関する研究—留学生・日本人学生の協働的活動がもたらす双方向的効果—」『北海学園大学学園論集』第134号, 1-17頁。
- [4] 岸磨貴子・久保田賢一・盛岡浩 (2010) 「大学院生の研究プロジェクトへの十全的参加の軌跡」『日本教育工学会論文誌』第33号(3), 251-262頁。
- [5] 瀧上凱令 (1998) 「高等教育における学生・教師の意識変化」『高等教育ジャーナル (北大)』第3号, 114-120頁。
- [6] 恒松直美 (2012) 「短期交換留学生の日本留学による意識変容」『留学生教育』第17号, 51-60頁。
- [7] 恒松直美 (2014) 「日本人学部生の大学生活における意識変容の語り：質的調査の観点から」『日

本総合学会』第13号, 19-26頁。

- [8] 鶴田洋子・小川捷之 (1985) 「異文化体験による日本人の心性の変容に関する研究—主に対人不安意識をめぐって—」『横浜国立大学教育紀要』第25号, 163-186頁。
- [9] 日瀨淳子・谷芳恵・上長然・則定百合子・石本雄真・齊藤誠一・城仁士 (2008) 「体験活動を通して個人がどのように変容するのかを測る尺度—これまでの関連研究レビュー—」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第2巻第1号, 143-147頁。
- [10] 水野マリ子・リチャード・ハリソン・高梨信乃 (2012) 「日本語学習支援活動による学生の意識変容について—神戸大学夏期日本語日本文化研修プログラムを中心に—」『神戸大学留学生センター紀要』第18号, 1-25頁。
- [11] 文部科学省ホームページ(2008) 「平成20年度『大学院教育改革支援プログラム』の採択プログラムの決定について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/09/08090802.htm (アクセス 2014年11月22日)
- [12] 文部科学省 HP (2009) 「専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム」
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/senmonshoku.htm (アクセス 2014年11月22日)
- [13] 安田淳一郎・近田政博 (2009) 「教育改善活動に参加する学生の意識変化—名大物理学教室における学生教育委員会の事例—」『名古屋高等教育研究』第9号, 113-132頁。
- [14] Dalton, J. C. (2001). Career and calling: Finding a place for the spirit in work and community. *New Directions for Student Services*, 95 (Fall), 17-25.
- [15] Mezirow, J. (1994). Understanding transformation theory. *Adult Education Quarterly*, 44 (1), 222-232.

【付記・謝辞】

本研究は「グローバル社会におけるパラダイム・シフト：日本の高等教育とキャリアにおける意識変容」(研究代表者恒松直美・文部科学省科学研究費補助金2009-2011年度基盤C21530881)の一環である。